

HAMON

～自然と生きる人の情報誌～

第5号

2023年10月1日発行



写真：こども共育サポートセンター提供

～目次～

- 団体紹介① **Kitchen Support 青** フードプロデューサー **あおやま のりやす 青山 則靖氏**
取材者：NPO 法人こども共育サポートセンター 代表理事 **ながえ たかし 長江 孝氏**・・・1
- 団体紹介② **川塾 代表** **しおざき けんた 塩崎 健太氏**
取材者：一般社団法人神山つなぐ公社 **あきやま ちぐさ 秋山 千草氏**・・・2
- 団体紹介③ **一般社団法人センスオブネイチャー**
プログラムディレクター・チーフカウンセラー **もりもと こうた 森本 弘太氏**
取材者：**いしばし ひろのぶ 石橋 宏宣氏**・・・3
- 走林社中プロジェクト紹介 **モモの部屋プロジェクト 「集いの広場」**
取材者：走林社中幹事／モモの部屋プロジェクトリーダー **しらい たける 白井 健氏**・・・4
- 大学研究紹介 **ふりかえり活動で思うこと**
取材者：流通科学大学人間社会学部人間健康学科講師 **たかはし ひろと 高橋 宏斗氏**・・・5
- コラム一滴 **三世代キャンプのススメ**
取材者：一般社団法人地球温暖化防止全国ネット理事長 **たかだ けん 高田 研氏**・・・6
- 編集後記 **HAMON プロジェクトメンバーより**・・・7

団体紹介 Kitchen Support 青
フードプロデューサー 青山則靖さん
あおやまのりやす

北海道でのエゾシカの有効活用について

飲食店のメニュー開発やテレビ番組・イベント、料理教室などで、誰でも簡単にできる料理法を伝えている人気のフードプロデューサー青山さんに、北海道で増えるエゾシカの有効活用についてお話を伺いました。

▼鹿肉のイメージを変える！

北海道では、昔から鹿をもらって食べていたが、オスの大きな鹿しか狩猟できなかったため、肉が臭かったり硬かったりするというイメージが残っています。青山さんは、そのイメージを払拭するために実際に狩猟を行い、「正しく処理した鹿肉が美味しい」というイメージに変えていきたいと考えています。

▼鹿肉のジビエ利用における課題と解決策

家畜肉は「と畜場法」に基づき、食肉処理場（食肉処理業）を経て食肉店（食肉販売業）を通じて流通しています。一方、野生鳥獣肉には「と畜場法」がないため、道庁では「エゾシカ処理マニュアル」を策定し、認証を受けた「認証処理場」で処理されています。



北海道には一〇〇以上の一次処理場があり、そのうち二十三か所が認証処理場です。年間約一七万頭の捕獲数のうち、認証肉として処理されるのは二〇％程度に留まります。認証肉のハードルが高いのは捕獲後、一次放血のみで二時間以内に処理場に持ち込むというルールがあるからです。鹿肉の流通量を増やすための取組として、衛生管理等の研修を終えた有資格者ハンターが、捕獲後に野外で内蔵摘出した個体を販売できるようにすることが必要だと考えています。そのための施策をエゾシカ協会のグランドデザインにて提案しています。青山さんは、料理人と猟師の立場から、正しく処理をした『美味しいエゾシカ肉』が多くの方へ届くように今後も活動を進めていくとおっしゃっていました。

Kitchen Support 青 紹介

<https://supportao.exblog.jp/>

▼取材者…長江 孝 氏
ながえ たかし
NPO法人

代表理事・猟師

子ども共育サポートセンター
二〇〇五年四月『子どもたち一人ひとりがイキイキと成長できる場所を創る』ことを目指し、同センターを設立し代表へ就任。小中学生対象の体験活動事業の企画・運営と青少年教育施設や保育園・幼稚園等の職員向けにリスクマネジメントや救急法などの研修事業を展開している。二〇二三年より貧困を余儀なくされている家庭の子どもたちに体験活動を届ける事業に取り組みを開始。二〇二三年二月に狩猟免許を取得し、今シーズンより狩猟を始める新米猟師NPO法人

子ども共育サポートセンター紹介

<https://kodomokyouiniku.org/>



団体紹介② 川塾

しおさき
塩崎

けんた
健太 (通称

ぺぺ) さん

がいます。

彼は、周りにうまく理解されない子
だけど、僕は甘やかし続けてきまし

川と人をつなぐ

川塾は、徳島県の吉野川をメインフィードとし、川遊びを通して、子どもたちに川と共に生きる知恵や技術を体感してもらい、『川と人をつなぐ』きっかけ作りができればと活動している団体です。

▼始まりは「泣き崩れる高校生たちの姿から」
大学院生の時からボランティアしていた団体「NPO法人吉野川みんなの会」の解散が決まったんです。その時、高校生になってやっとスタッフになれた子たち三、四人がポロポロ泣き始めました。「え、そんなに？」とも思いましたが、高校生たちが泣き崩れる姿を見て、価値を実感しました。僕らの世代で無くしたらいけないと思い、仲間と「川塾」という団体を立ち上げて、活動を引き継ぐことにしました。元々、地域の小さい子を大きいお兄ちゃんたちが川へ連れて行き、大きくなったらまた下の子を川へ誘うという流れも大好きでした。僕らがやらなかったら、その流れがなくなるとも思ったのです。

▼いい気持ちの集まる居場所になるといい
小学生の時に参加して、高校生から社会人になるまでボランティアをしてくれている子



た。彼は、めちゃくちゃ子どもに好かれ、内気な子を彼が見つけてケアすると「ミッキー(彼のあだ名)と寝るならこのままキャンプを続けられる」と子どもが言い出さずんです。
目立つ子はあまり干渉しない方がのびのびできます。でも、ちよつと生きづらそうな子は、たくさん見守ってあげたくなる。川塾は家族だと思ってます。ここに帰ってきたら、甘えてもいいし、ほっとできるようなところであってほしい。大人も子どもも居場所になるといい。プライベートで苦い思いをしても、ここではいい気持ちで過ごせるようにと思っています。

川塾

NPO 法人川塾「お堰の家」

徳島県徳島市国府町佐野塚字出口5-7

メール kawatomoplus@gmail.com



▼取材者.. 秋山千草氏

あきやまちぐさ

一般社団法人神山つなぐ公社
(ひとづくり担当)

東京出身、五年前に徳島県の神山町へ移住。地域の小中高を中心に学校外から、まちの教育に関わっています。昨年「地域の先達に教わる子どもたちの自然体験」プロジェクトを始め、子ども時代に山・川でたつぷり遊んだ先達と、子どもたちとの遊びの機会をつくっています。神山町を流れる「鮎喰川」は、多様な世代の身近にあって、人と人がつながる「川」です。

団体紹介③ 一般社団法人 センスオブネイチャー

プログラムディレクター・チーフカウンセラー 森本弘太さん

もりもこうた

人生と社会を豊かにしていく

明治時代からの古民家を改装した「センス」の自然遊びのベース基地「糸島・たきびの家」（福岡県糸島市）で、森本さんにお話を伺いました。

▼ほんものの自然の中での活動

（株）エンカレッジで、理念を体験型で浸透させるアウトドア事業部を担当。また、その関連団体（一社）センスオブネイチャー（通称 センス）で子ども主体のキャンプを様々な専門家とのコラボレーションによって企画・運営しています。

四季折々、九州各地の山・川・海など、本物の自然の中で、そこでしかできない多種多様なプログラムを提供しています。

このキャンプに参加した子ども達の保護者の方から「うちの社員にもやってほしい」と依頼され、新入社員研修に発展したというケースもあります。キャンプのねらいは自然の中での遊びと冒険を通じて、何が大切かを自分で考え、判断し、行動する力を育むことです。ひとつひとつの体験を重ねることで、自らの人生と社会を豊かにしていく力を身につけていってほしいと願っています。



▼これからの展望

現在の活動の学術的な裏付けを行うため、大学院で学んでいます。また、キャンプを通じて、子どもたちの3つ

のセンスである《感じる力・考える力（え、なぜ！）》、《社会性・リーダーシップ（ともに）》、《自信・挑戦心（わたし）》を育み、7つの価値を大切にしながら、自然体験活動や野外教育がビジネスとして成立する基盤づくりを行っていきたいと思います。



一般社団法人 センスオブネイチャー

<https://sense-of-nature.jp/company/index.php>

福岡県糸島市二丈上深江 90

森本弘太氏

メール：morimotokota@gmail.com

▼取材者：石橋宏宣氏

いしばしひろのぶ

「バイクツーリングの目的地に取材活動を加えてみないか」と走林社中の桜井さんに誘われ、取材を行いました。

森本さんのOBS、アルパインスタイル、オーロラガイド、WEA等々、国内外での豊富な経験、野外教育への情熱に触れ、よい刺激を受けることができました。「なすことによつて学ぶ」を、体験だけに終わらせずに言語化することなど、森本さんのキャンプに参加したくなりました。



走林社中 プロジェクト紹介 モモの部屋 集いの広場

走林社中が手がけるプロジェクトの一つオンラインサロン「モモの部屋」は、二〇二〇年度から始めた「人を育てること」を議論するオンラインサロンです。今年度で三年目の取り組みとなります。

今回はモモの部屋のコンテンツの一つ、ボイスサロン『集いの広場』についてご紹介いたします。

集いの広場は、毎月第二金曜日に開催しています。モモの部屋サロンメンバー一人をスピーカーとして招き、ご自分の活動や想い、チャレンジしてみたいことなど、オンライン上でお話ししてもらい、参加した皆さんと意見交換し、次の活動へのヒントを見つけていただく内容となっています。

これまでお話いただいた話は、「地域の教育や観光について」、「非日常と日常の体験に

ついて」、「二七一人（全国の自治体数）の仲間を集めるためには」など多様なテーマがあります。全てスピーカーの方ご自身で設定したもらったテーマです。

モモの部屋では、現在八〇名以上のサロンメンバーの登録があります。活動場所も沖縄から北海道まで全国各地で、サロンメンバーの活動も多岐にわたります。月に一回、年間十二人のサロンメンバーの話を気軽に聞けるのは、オンラインサロンならではのメリットであり、とても貴重な交流の機会となっています。

サロンメンバーの中には「リアルで会ったことがないけれども、もう随分親交が深い気がする・・・」という方も多いのではないのでしょうか。集いの広場では、これからもメンバー同士の心の距離を近づけ、新しい繋がりを作るコンテンツとして運営していきたいと思っています。

モモの部屋 幹事 白井健

第78回 「『子どもたちにライジャケを！』香川での取り組みから見てきたこと。」

2023.8.18

ゲストスピーカーは、ライジャケサタこと森重裕二さん（子どもたちにライジャケを！）です。モモの部屋のメンバーがご自身の団体や活動の様子をお話しいただきます。

テーマは「『子どもたちにライジャケを！』香川での取り組みから見てきたこと。」です。



▶ 0:00 / 1:07:11

第77回 「非日常を日常へ」

2023.7.14

ゲストスピーカーは、牧田和紗さんです。

モモの部屋のメンバーがご自身の団体や活動の様子をお話しいただきます。今回はこの香から高尾総市の地域おこし協力隊になった牧田和紗さんです。テーマは「非日常を日常へ」です。



▶ 0:00 / 1:10:28

モモの部屋 Momo's room

光を見るためには目があり、音を聞くためには耳があるのとおなじに、人間には時間を感じとるために心というものがある。そして、もしその心が時間を感じ取らないようなときには、その時間はないもおなじだ。「モモ」より

ミヒヤエル・エンデ著「モモ」の世界観の中で、「緊急ではないが重要なこと」を語るオンラインサロン

円形劇場
(講演会)



集いの広場
(ボイスサロン)



カシオペア
(コラム)



作戦会議
(ライブ配信)



地域
ミーティング



ベッポからの便り
(読書会)



様々なコンテンツの中で仲間と繋がり、今一度「大切なこと(すべきこと)」を再認識しませんか

大学研究紹介

ふりかえり活動で思うこと

大阪体育大学で野外教育に出会った私は、年代・世代を問わずスポーツチームのチームビルディングキャンプの指導にあたることが多くありました。プログラムはASEを活用することが多く、チームの監督やコーチもファシリテーターと一緒に選手を見守り、普段の競技場面とは異なる表情や行動を見られることで、その後の指導にも活用されることがありました。

(https://camping.or.jp/archive_and_download/data/13752.html)。

ASEではふりかえり活動が重要視されます。同じアクティビティでも、解決のための役割や活動を通して得た気づき、一般化のための普段の競技場面や個人の背景は全く異なるからです。そのため、個人が活動を通して得

た気づきを本人が認知できるように言語化を助けたり、次のアクティビティのためにそれぞれが仮説化したりすることが重要なのです。

参加者が得た気づきを、ふりかえり活動を分析することで明らかにし、ASEの効果进行分类した研究があります

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/joej/23/2/23_2020_0004/_article/-char/ja)。

この結果によって、「チームワークの重要性」や「最後までやり抜くことの重要性」ほか多くの気づきが得られることが分かり、ASEはチームビルディングとしてさまざまな目的に対応できることが示されました。

このように、ふりかえり活動は活動の成果を測る上でも良い指標になります。しかし私たちは、広大な景色を見たときなど大きな出来事を経験した際、うまく言語化できない感情や数年後に意味づけられる感動があることを知っています。私は、その

ような「その場で言語化されない感情や感動」に対するアプローチの手段がありません。そういうときはふりかえり活動は不要なのではないか。それでも言葉にならない感情を言語化させるべきなのでしょうか。なにか一番教育的なのか、これからも実践と研究を繰り返しながら考えていきたいと思っています。

▼寄稿者：高橋宏斗

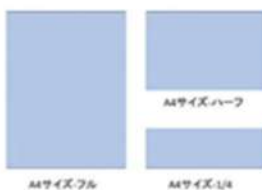
(Hioto Takahashi)

流通科学大学人間社会学部人間健康学科講師。前職は公益社団法人日本キャンプ協会事務局



広告スポンサー大募集

10,000円から広告スポンサーになることができます。
お問合せはこちらのメールに、「広告スポンサー希望」と明記の上ご連絡ください。



A4サイズフル 4万円(税込)
A4サイズハーフ 2万円(税込)
A4サイズ1/4 1万円(税込)

年に4回の季刊誌として発行しています。
電子ジャーナル版での発行です。

デザインの入稿、デザイン依頼などは問い合わせ
をお願いいたします。

違って、前後より面白いと思います。

HAMON編集部

走林 走林社中

日本を支える人材、けん引する人材を育てる

カラーで！リンクも貼れます！

コラム 一滴

▼寄稿者…一般社団法人
地球温暖化防止全国ネット

理事長 高田 研さん

三世代キャンプのスズメ



子供たちが小さかった頃、車にキャンプ道具と子供三人、家内も詰め込んで二週間ぐらい帰ってこなかった。よく使い込んだファミリーテントは雨漏りし、ブルーシートを上には張らないと雨露がしのげなかった。

それでも小さい頃は喜んでいた。いやそれしか旅を知らなかった。そんな子供達も大きくなって、自分たちの家族だけが違うことに気づいた。

「もうキャンプやったら一緒にいかないからね。」と長女の脱アウトドア宣言。

こんなはずではなかった。幼児から自然体験が豊かであれば自然が大好きな大人になるはずであった。

妙高高原の国設キャンプ場にはよく行った。インタープリターの根津爺さんのことが大好きだった長男は、「ボクが大きくなったらネズじいちゃんになる。」と宣言したが、家にゴキブリが出ただけで騒ぐシテイボーイに育った。

子供たちが家を離れるとキャンプは家内と二人になった。色とりどりのインスタ映えする大きいテントが立ち並び、若い夫婦と子供たちがはしゃぐ

キャンプ場。その間に二人用のテントを張って静かにキャンプ。

そういえば、昔テントで旅したヨーロッパのキャンプ場はどこも退職後をのんびりと過ごす老夫婦がたくさんいた。「そうか時代を先駆けているのだ。これが高齢化社会の新しいスタイルなんだ。」と言いつけた。

長女に子供が生まれ、走り回るようになったら、「お父さんキャンプに連れて行って。」と言いつけた。あれから何年たっただろう。

我が家の三世代キャンプが始まった。子供達の小さい頃の思い出が蘇る。

そんな長女の子供たちも大きくなり、姉は高三で弟は中三。受験生だが夏はキャンプ。次女の子供たちは四歳と二歳。昨年から三世代キャンプの主演となった。

今年には次女の連れ合いの両親がキャンプデビュー。七二歳で初めてテントを新調。普段は家で何もしないと奥さんに言われ続けたお爺さん。焚き火は息子より上手だった。

家族キャンプは一族キャンプとなった。来年はゴキブリ嫌いの長男の子供も歩けるようになる。

幼児からの自然体験も捨てたものじゃあないということ。私のコラムは失礼する。



Marumimi

HAMON【編集後記】

—プロジェクトメンバーより—

(徳田 真彦)

様々な人々が出会い、繋がり、想いを紡いでいく。ジャーナルがその一歩に繋がればいいなあと思います。小さくても確かな一歩を踏み出していきたいと思います。

(谷 慶子)

夏、20年振りに北海道へ行ってきました。生活圈でのヒグマの出没やエゾシカの繁殖に関する課題を知り、思いを巡らしていたらタイムリーな団体紹介原稿が届きビックリ！

(小林 政文)

新しくチームに加わりました！ジャーナルをとおして皆さんに出会っていくのが楽しみです。皆さんの思いが波紋として多くの人々に伝わっていくように頑張ります！

地域で広がる活動の輪

HAMON を創刊して1年がたち、団体紹介は1道2府14県となりました。もともと、地域で輝く団体にスポットが当たるようにと、このHAMONが始まりました。それが5回の発刊で広がっていることを非常に嬉しく思います。取材をしていただく方は元々の知り合いからスタートしていますが、取材先はそれぞれのライターにお任せしております。勿論相談をしながら進めていますが、出てくる団体の方は皆さん初見の方ばかりで、本当に多くの団体がいるのだと思い知らされます。

地球環境基金の「NGO・NPOの団体情報」によると2012年までに4532団体があると言われていています。しかしながら、法人格を持たない団体も数多く存在し活動している現状から見ても、まだまだ多くの事業者がいることとなります。HAMONでは、地域で活動している方々をつなぐ役割も担っていると感じています。近くにいるお仲間で、紹介していただける方がいらっしゃいましたら、是非教えてください。たくさんのお仲間に光を当てることができればと思っています。

—HAMON— 編集長 小澤 潤平



走林社中
soulin2017.net

発行人：桜井義維英

発行年月日：2023年10月1日 第5号

編集：小澤潤平、谷慶子、徳田真彦、小林政文

次回、第6号の発行は1月1日を予定しています。